

「虫めがね遊び」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

こどもの頃、私の住んでいた多摩丘陵の住宅地は造成中で、空き地や看板がたくさんあった。看板の裏なんか、悪ガキの格好の隠れ家だった。俗にいう「基地遊び」というやつである。駄菓子を買って隠したり、駄玩具を「等価交換」したり、本当に楽しかった。中でも虫めがねは、どうしても必要な遊び道具だった。

もちろん、太陽の光を集めて、何かを燃やすのである。小さな虫めがねしか持っていなかったのも、炎が出ることは稀で、焦げて煙が出るだけなのだが、それだけでも面白い。枯葉、紙、木の枝、蟻んこ(!)など、高熱にして遊んだ思い出がある。子どもにとって、あれほど面白い遊びはないだろう。

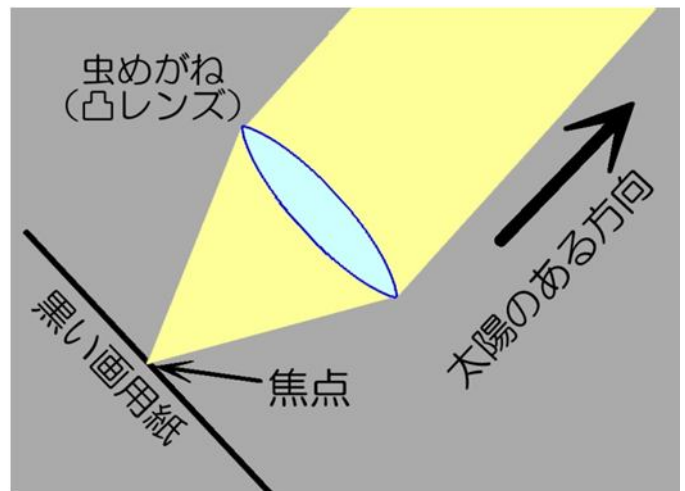
3年生の教科書にも、虫めがねで太陽光を集めて紙を焦がす活動が載っている。「煙が出たらやめましょう」なんて書いてある。安全上の配慮だ。正しくは「煙が出て穴があくまでがんばりましょう。」である。実際に子どもたちは、30分でも40分でもがんばっている。それほど面白いのだ。爪に光を当てないこと、手のひらや膝の上に紙を置かない、虫めがねで絶対に太陽を見ない・・・こうした最低限の安全指導は欠かせないだろう。



最初はなかなか焦点が合わず、煙も出ないし、紙に穴も開かない。しかし、コツをつかむと、ピッタリと焦点を合わせられるようになる。

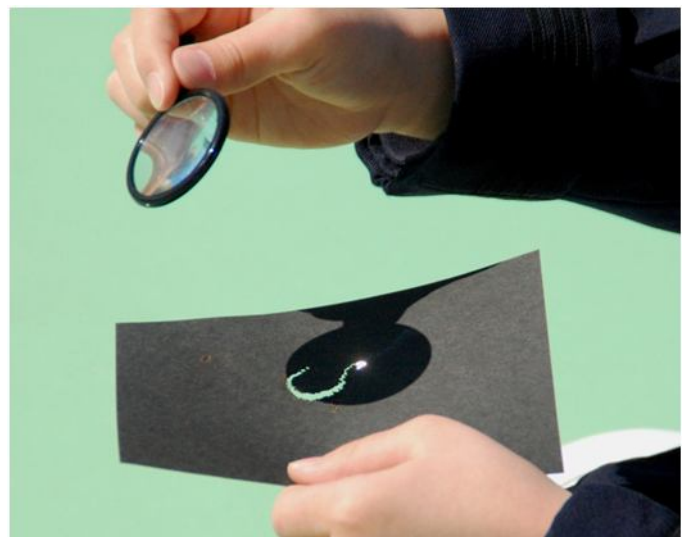
「うわー、煙が出たよ！」

「焼き芋みたいな甘いにおいがする！」



(作図 ; C. Tanaka)

大切なことは、太陽光に直交するように虫めがねと黒い紙の位置を調整することだ。虫めがねと紙は平行なほうがいい。しかし、3年生の子どもにこの理屈はわからない。わからなくてもいいと思う。何度も試しているうちに、太陽、虫めがね、紙の最適の位置関係に気づくのだ。



うまくなってくると、紙の上に絵や文字を描けるようになる。描いた文字や絵が何なのか、当てっこゲームも始まる。太陽の光だけで、紙を丸くくり抜く子どももいる。できあがった「作品」を、子どもたちは大切そうに、ノートに貼って「鑑賞」しあっていた。